

紋別市の水産関連顕彰碑 松崎隆一翁 望洋之碑

野村 哲一

紋別市は北海道のオホーツク海に面した水産業を基幹産業とする市である（写真1）。紋別港から坂道を上った見晴らしの良い場所に、よく整

備された紋別公園（紋別市花園町八丁目）があり、その公園の中央付近に高さ2メートル余り、総重量約40トンといわれる自然石を用いた堂々とし

た碑が設置されている(写真2)。この碑が松崎隆一氏(以下、敬称省略)を顕彰した「望洋之碑」である。



写真1. 紋別公園から見た紋別港。周辺には水産加工場が多数見られる。



写真2. 紋別公園に建立されている「松崎隆一翁 望洋之碑」表面

碑文は碑の表に「松崎隆一翁 望洋之碑」とだけ記されており、裏面には「昭和四十七年歳在壬子八月十八日建立 紋別市体育連盟、紋別市文化連盟、株式会社日缶、日缶社長稲生平八謹書」と刻まれた金属板がはめ込まれているだけで(写真3)、碑設立の趣旨や顕彰者の略歴を記した文言は刻まれておらず、この碑の周囲にも説明等は見られない。



写真3. 望洋之碑 裏面の建立者

建立当初から碑の説明文はなかったそうで、予備知識が無いとこの碑が北洋漁業と紋別市の

水産加工振興に大きな功績のあった人物の顕彰碑とは理解しがたいかもしれない。私も、前号の編集後記で紹介された試験業務のため、毎月の様にこの公園隣の市民会館を訪れていたが、JFSTA NEWS 58号で紹介した「カワサキ船」に関する資料を調査中に、この「望洋之碑」のことを偶然に知るまで、この碑にたどりつくことはなかった。

紋別郷土史研究会(1980)の紋別石碑散歩でもこの碑を取り上げているが、その表題も「体育振興の立役者松崎翁」である。碑を初めて見た方々もおなじように感じるであろうが、体育振興と水産業は直ちには結びつかない。しかし、紋別郷土史研究会(1980)の本文では表題とは趣が異なり、松崎隆一と蟹缶詰との関連についての記述が多くを占めており、やっとならぬ関係者の顕彰碑であることが明らかになる。

碑の裏側の建立者に名前が連ねられている株式会社日缶は昭和26年(1951年)に紋別市に設立された蟹缶詰を主として製造していた食品製造会社、日本缶詰生販株式会社のことであり、この望洋之碑の松崎隆一は会社設立時の同社社長であった。

松崎隆一は長崎県で生まれ、長崎県水産講習所(現 長崎県立長崎鶴洋高等学校)を卒業後、我が国で初めての缶詰工場とされている長崎市の松田缶詰工場に明治43年(1910年)に就職し、缶詰技術を修得した。松田缶詰工場の設立者、松田雅典が我が国で最初に缶詰を試作したのが明治4年(1871年)長崎市においてであり、明治17年(1884年)には県から缶詰試験場の払い下げを受け、松田缶詰所を長崎市に開業している。日本での缶詰の歴史が始まった場所が、松崎隆一がその一生を捧げた「蟹缶詰」との出会いの場所となったのであろう。

明治45年(1912年)から大正2年(1913年)までは、カムチャッカで日魯漁業株式会社(現 マルハニチロ株式会社)の前身である堤商会で工場建設と鮭缶製造に従事した。その後大正6年(1917

年)まで東京高等工業(現 東京工業大学)で機械工学を学び、これらの知識と実学、経験が後の船上での蟹缶詰製造や紋別市での食品加工の振興に大きな力となったのであろう。

大正7年(1918年)には当時の農商務省水産講習所(現 東京海洋大学)の嘱託となった。大正3年(1914年)から水産講習所練習船雲鷹丸は、北洋においてタラバガニ調査を行い、その漁業資源としての有効性を調査していたが、問題は鮮度低下の早いカニ肉をいかにして缶詰とするかであった。

大正8年(1919年)に所長の伊谷以知二郎は松崎隆一に沖合の船上で蟹缶詰を試作することを命じた。松崎隆一は雲鷹丸に船内缶詰製造設備として、三馬力の電動機、ハンドシーマー、簡易エキゾーストボックス、堅型レトルト各一基を据え付けて出港した。この航海で船上での蟹缶詰製造工程の様々な問題を解決するとともに蟹缶詰20函(1函は1ポンド缶48個入り)を製造する良い成績を取めた。しかし、カニの洗浄等に真水を使用しての缶詰製造であったため、船上では真水が貴重であった当時の状況では生産能力には限界があり、そのままこの技術を用いての蟹工船事業とはならなかった。

その後、富山県水産講習所(現 富山県水産研究所)の呉羽丸などが海水による蟹肉の洗浄等の改良を行い、船上での蟹缶詰の製造技術が確立されることとなる。

この松崎隆一の雲鷹丸船上での蟹缶詰試作が、いわゆる工船による蟹缶詰製造へと技術的な発展をしていく端緒を開いた技術であろう。岡本正一編纂の「蟹缶詰発達史」では、この雲鷹丸での松崎隆一の成果を「我が国に於いて船内に缶詰製造の設備をなして蟹缶詰を製造した最初である」と記している。

大正12年(1923年)に松崎隆一は蟹工船事業に乗り出すが、この蟹工船事業に関連したことが技術者としての氏の功績に暗い影を落としてしまう。小林多喜二の小説「蟹工船」に登場する鬼監督のモデルではと噂されるなどして、やがて蟹

工船事業からは撤退した。

昭和4年(1929年)に地元缶詰業界からの招きに応じて蟹缶詰工場建設のため紋別市へと移り住む。紋別市に移動するまでに長崎、東京、カムチャッカ、函館と移動しているが、常に蟹缶詰、蟹漁業との縁は切れていない。以後オホーツク海に面した水産都市紋別で生涯を過ごすことになる。

紋別の水産2018の「紋別港と水産の歴史」では昭和5年(1925年)に「松田鉄蔵が、紋別地方における冷蔵庫第一号を松崎隆一の設計で建設」と記している。紋別市史によると、松崎隆一の設立した日本缶詰生販株式会社が生産を始めたことにより、紋別市の缶詰事業は大きな発展を見せたとしている。当時は、ケガニやタラバガニを豊富な漁獲高のもとに缶詰としていたが、後には農産物の缶詰まで範囲を拡大している。紋別での缶詰生産は昭和36年まではケガニ、タラバガニ、ホタテガイ、サンマであり、39年以降43年まではケガニ、ズワイガニ、ホタテガイ、サンマ、50年まではズワイガニが中心となり54年以降はホタテガイ、サンマ、ズワイガニが三本柱となる。昭和36年には、新紋別市史によると、缶詰生産高は1,925トン(176,891函)まで増加している。

さらに、松崎隆一は紋別だけではなく、近隣の自治体での水産加工の振興にも自ら経営者として乗り出し大きな貢献をした。

逝去された折には、地元新聞や地方紙が多くの訃報を載せている。「カムチャッカに渡って開拓、北海道百年を支えた一人 缶詰に打ち込んだ一生(紋別新聞 昭和四十六年八月二十日)などと、松崎隆一の経歴をも詳しく報じている。望洋之碑の建立者に名称を連ねている団体の社会活動にも熱心に取り組み、多くの支援を行った。

没後1年でこの望洋之碑が紋別に建立されたことは、松崎隆一が紋別市および周辺における缶詰事業を中心とした水産業に大きく貢献したことを評価し、顕彰したものであることは間違いない。しかし、建立した方々の胸の内に雲鷹丸での最初の「船上での蟹缶詰製造」を顕彰する気持ちが

あったかは、推察の域を出ない。松崎隆一自身も、紋別においては北洋漁業についてはほとんど語らなかったようである。「他人の犠牲に於いて自己の榮譽を計る勿かれ」の書を居間に掲げていたのは、幾多の北洋漁業の修羅場を踏んだ教訓と北洋に関して「口を閉ざした理由」かもしれない。

紋別市立図書館に所蔵されている石川清熊編による松崎隆一翁資料集は、末尾の参考資料に記したいずれの著者も目を通されている松崎隆一に関する一級の資料である。資料を見せていただいた紋別市立図書館の話では、いまでも毎年数名の方が紋別市以外からも松崎隆一の資料を閲覧に来られるそうである。

しかし、北洋における蟹工船は昭和40年代に廃止となり、紋別市沿岸でのタラバガニの漁獲量は平成28年(2016年)で77トン、29年(2017年)で129トン、ケガニは平成28年が114トン、29年が102トンの低水準となり、原料入手の困難から蟹缶詰工場もほとんどが転業もしくは廃業となっている。水揚げ金額70億円を示す紋別港でも、ほぼ同様の金額をロシアからのカニ輸入が示した時期もあるが、それも現在は激減している。

松崎隆一が心血を注いだ缶詰生産は、紋別の水産2018では平成29年の生産数量総体でこそ341トンとなっているが、その内訳中の「かに」の欄は空欄である。

この「松崎隆一翁 望洋之碑」には長文の碑文や説明文はないものの、幸いなことに参考資料として列記した著書により記録され、今でも記録を辿ることができる。しかし、全国には長い年数を経過し、地域の産業構造が変化したため、記録そのものが少なく、風化した感の碑がまだまだ多数存在すると思われる。「歴史を知り、歴史に学ぶ」観点からも今のうちに多くの碑の記録を集積することが重要であろう。

斎藤 望 著の「北洋の彼方に一蟹工船の幻影」の終段の部分を原文のまま引用させていただき、まとめとしたい。

『北海道、オホーツク海沿岸の紋別公園にたた

ずむ「松崎隆一翁 望洋の碑」。公園を訪れる人々のほとんどは、その碑の前で立ち止まる事もなく歩いて行く。松崎が紋別の各界で大きな功績を残した人物であった事は、没後四十年を隔てた今、人々の記憶から忘れ去られ、更にそれ以前、創業期の缶詰生産の発展に情熱を注ぎ、「蟹工船」の工法確立にも貢献し、船を指揮し北洋に身を捧げていた姿も、「蟹工船」の船団の「幻影」とともに歴史の彼方に消えていく。』

本稿を纏めるにあたり、松崎隆一に関する種々の情報を与えて下さいました株式会社しんや顧問の高橋 淳氏には、ここに記して感謝申し上げます。

なお、同氏は株式会社日缶に在職経験があり、松崎隆一翁資料集に載せられた一部の資料を編者に提供されています。

参考資料

- 藤崎康夫. 1999. 北洋フロンティア 漁業家・菊池鉄彌が駆け抜けた近代日本. 毎日新聞社.
- 石川清熊 編. 2006. 松崎隆一翁資料集. 紋別市立図書館蔵.
- 井本三夫. 2010. 補論 松崎隆一・博愛丸のその後, 蟹工船から見た日本近代史, 100-103. 新日本出版社. 東京.
- 紋別郷土史研究会. 1980. 紋別石碑散歩. 郷土誌, 第6号, 71-73. 紋別市郷土史研究会. 紋別市.
- 紋別市史編さん委員会. 1983. 新紋別市史 下巻. 紋別市役所.
- 紋別市. 2019. もんべつの水産 2018. 紋別市.
- 岡本正一 編. 1944. 蟹缶詰発達史. 霞ヶ関書房. 東京.
- 斎藤 望. 2008. 蟹工船の響き. 文芸オホーツク, 17, 1-15.
- 斎藤 望. 2011. 北洋の彼方に一蟹工船の幻影. コスモス文学, 386, 237-261.
- 宇佐美昇三. 2013. 蟹工船興亡史. 凱風社. 東京.
- 宇佐美昇三. 2018. 水産について考える会「蟹工船の実像に迫る」～雲鷹丸も担ったシーパワー. 楽水, 861, 24-30.